

「二」の意味と機能に関する考察

吉 永 尚

1. はじめに

「ず」と「ずに」の接続文を比較すると、少なからず文法的振る舞いの相違が観察される。これらは、構造的な観点からは説明しにくく^{注1)}、「に」の本質的な意味・機能に関与していると考えられる。本研究では、二つの文法現象に絞って観察し、「に」の意味と機能について考察を加える。

A) 並列用法の否定形接続

- (1) a. 明は真面目に出席せず／?? 出席せずに雅子は欠席が多い。
b. 明はエビを全く食べず／?? 食べずに花子はピーマンをいつも残す。

共に、「ずに」では容認度が低い^{注2)}。

しかし、次のような例では容認度にあまり違いがない。

- (2) a. 待っていた花子が来ず／来ずに太郎が来た。
b. スピード狂の太郎がつかまらず／つかまらずに安全運転の花子がかまった。

(1) (2) は共に並列的な連用否定形接続文であり、おおむね等位構造を取ると思われる。等位構造については不明な点も多いが、なぜ、(1) では「に」の有無によって意味的な相違が見られるのだろうか。次に否定の作用域について相違を観察する。

B) 否定の作用域

- (3) a. 総務課だけに、昨日、その事務官は招集をかけず (帰宅してしまった)。
b. 解決策だけを、昨日、部長は言わず (部屋を出て行った)。

(共に三原 (2011: 83))

(3) では、だけ>否定、つまり「招集をかけなかったのは総務課だけ」という「だけ」の意味が否定より強い解釈は可能だが、否定>だけ、つまり「総務課以外にも招集をかけ、総務課だけに招集をかけたのではない」という否定が「だけ」より強い解釈は容認性が極めて低い。

しかし、三原 (2011) で指摘している様に「ず」を「ずに」に変えるとだけ>否定及び否定>だけの両方の解釈が可能になる。

- (4) a. 総務課だけに、その事務官は招集をかけずに、(財務課も招集した)。

(三原 (2011: 83 註 23))

b. 解決策だけを、部長は言わずに、(他の観点からも説明した)。(筆者作例)

また、三原 (2011: 84, 85) では、名詞句に後続する「だけ」のアクセント型について、関西方言では次の二種が存在するとし、解釈との関連性を指摘している。

①N だけ (HH) …… NP (特定名詞句) → だけ > 否定解釈

②N だけ (LH) …… QP (数量詞句、不定名詞句) → 否定 > だけ 解釈

従って、(3) では①N だけ (HH) というアクセント型しか許容されないが、(4) では、①と共に②N だけ (LH) というアクセント型も許容される。

三原 (2011: 85) では、②N だけ (LH) というアクセント型で発話される場合、つまり否定 > だけ (否定の意味が「だけ」の意味より強い) 解釈が終止形で許容される現象について、終止形では否定を内に含む動詞移動が Force 位置まで行われるため (焦点句より上位に来るため)、否定 > だけ 解釈が可能となり、①②両方のアクセント型が許容されるとしている。また、連用形、連体形では②が許容されないが、その原因について、否定を含む動詞移動が連用形では Neg 位置で、連体形では Fin 位置で止まるため、①しか許容されないとしている。しかし、(4) の「ずに」形接続文においては、否定を内に含む動詞移動が Force 位置まで行われる事は構造上、考えにくく、三原 (2011) でも原因は不明であると述べている。

「に」の有無によって構造的観点では説明しにくい文法的相違が生じるのはなぜだろうか。

2. 「に」の本質的な意味・用法

「に」の有無によって文法現象が異なる原因を調べるため、「に」の本質的な意味・用法について先行研究 (茅野・秋元 (1986)、三原 (2009 a)) を挙げる。

2.1 「に」の用法分類

茅野・秋元 (1986) 『外国人のための助詞』 (pp.8-9) では、多岐にわたる「に」の用法を例文を挙げて分類しているが、以下、各用法を列挙し、主要な意味・用法について考える。

1. 人や物の存在する場所・状態
 - a. 田中社長は午前中は会社にいる。
 - b. あの女優は今、人気絶頂にある。
2. 静止的な動作の行われる場所
 - a. 山本さんは六本木駅の近くに住んでいる。
 - b. いすに座る。 c. 会社に勤める。 d. ここに置く。
3. 動作の時間や回数
 - a. 飛行機は十時に着く。
 - b. 一日に三回この薬を飲む。
4. 動作の到着点
 - a. ルーブル美術館に行く。
 - b. 体力の限界に達した。
5. 受け身や使役の動作主
 - a. 隣の人に足を踏まれた。

- | | |
|-------------------|--|
| 6. 変化の結果や状態 | a. 部長に昇格する。
b. 弟に車を洗わせた。 |
| 7. 動作・作用の向けられる対象 | a. 故郷の両親に手紙を書くつもりだ。
b. 警察はその事件に目を向けた。 |
| 8. 広い場所から狭い場所への移動 | a. 電車に乗る。
b. 大学に入学した学生達。 |
| 9. 動作の目的 | a. 映画を見に新宿へ行った。
b. 運動をしに体育館に出かけた。 |
| 10. 動作性名詞を伴う動作の目的 | a. 買い物に行く。
b. ゴルフに行く。 |
| 11. 動作の基準 | a. あの小説にもとづいて作られた映画。
b. 協定によって決められた。 |
| 12. 名詞の列挙 | a. 料理はすしにてんぷらにうなぎだった。
b. クラスの学生は中国人に韓国人にアメリカ人だ。 |
| 13. 名詞の組み合わせ | a. 梅にうぐいす。
b. 竹に虎。 |
| 14. 前から決まっている状態 | a. このマンションの一階はスーパーになっています。
b. 右側は外科の病室になっている。 |
| 15. 慣用的な言い方 | a. この学校では制服を着ることになっている。
b. 毎朝三十分、ジョギングをすることにしてあります。 |

上記の 15 用法には類似している用法もあり、大きく分けると、次の 3 つに纏める事ができると思われる。

- i) 存在や動作の場所・状態
- ii) 動作の方向・着点
- iii) 変化の結果・状態

2.2 「存在」の意味・用法

三原（2009 a）では、移動動詞構文と結果構文を統一的に扱う事を提案し、「に」句で表現される結果述語構文を「PP 型結果構文」、つまり「後置詞句型結果構文」とし、「に」の本質的な意味は「存在」を表わす事であるとして次の様な例文を挙げている。

- (5) a. 時計をバラバラに分解する。

- b. 空き缶をペチャンコにつぶす。
- c. スープをゼリー状に固める。
- d. 靴をドロドロに汚す。(以上三原 (2009 a: 459))

同論文では、「移動動詞構文は位置変化したモノが着点に「存在する」ことを表わし、結果構文は状態変化したモノが着点 (= 結果状態) に「存在する」ことを表わす構文であるが、限界動詞では、動詞の終了時点において着点 (= 結果状態) にモノが存在するので、本来は状態変化の方向を表わす「に」が存在を含意することになり結果構文が成立する」としている。また、非限界動詞では動作の終了時点が現出しないので、「に」は方向のみを表わすことになり結果構文が成立しないとし、「に」で「結果状態」が表示されるには、「存在」の意味が必要不可欠であり、その有無が結果構文の文法性を決定するとしている。

- (6) a. 限界動詞 (三原 (2009 a: 458))

「に」= 方向 + 存在 結果状態
 ───────────────────────────▶

- b. 非限界動詞

「に」= 方向のみ × 結果状態
 ───────────────────────────▶

従って、茅野・秋元 (1986)、三原 (2009 a) を基に「に」の働きについて考察した結果、主要な意味・機能として「存在」の概念が挙げられる。

3. 文法現象と「に」の意味・機能

A) 並列用法の否定形接続

- (7) 明は真面目に出席せず／？？出席せずに雅子は欠席が多い。(再掲)
- (8) 待っていた花子が来ず／来ずに太郎が来た。(再掲)

(7) では二つの並列節の独立性が強く、結束性が弱いのに対し、(8) では結束性が強く、並列節でありながら前後のワンイベント性が強い印象を受ける。前述の様に、「に」には「～の状態において」という「存在」を表わす意味性質があるので、「ずに」には「～ではない状態において」という意味があると考えられる。また、「に」は「～のに」「～のわりに」という逆接的接続形式を形成し、否定的な状態を内包した存在を表わす機能が備わっているので、この議論の傍証となりうる。

(8) では「花子が来ない状態において、(意外にも) 太郎が来た」という否定的な状態の存在を介し結束性が強くなっていると考えられる一方、(7) では、二つの節の独立度が高いため、「ずに」形では座りが悪くなっていると判断される。

B) 否定の作用域

- (9) 総務課だけに、昨日、その事務官は招集をかけず (帰宅してしまった)。(再掲)

(10) 総務課だけに、その事務官は招集をかけずに、(財務課も招集した)。(再掲)

(9) では、「ず」節は継起的に後続節に繋がり、「(他の課にはかけたのに) 総務課だけには招集をかけないで、帰宅してしまった」という単純解釈に傾くため、だけ>否定解釈のみが許容されるようになっている。つまり、「ず」の否定の意味は弱く焦点句の「だけ」の意味が優勢になっている。

一方、(10) では、「に」の付加によって否定>だけ解釈が可能になっているが、これについても「に」が持つ「存在」の意味性質が関与していると考えられる。「ず」と組み合わせたり、「ずに」となる事によって、「～ではない状態の存在」という「否定的な存在」が強調され、焦点句の「だけ」よりも「ず」の否定が優勢になり、否定>だけ解釈が可能になっていると考えられる。

「総務課だけに招集をかけるという事態ではない状態の存在において、～」という付带的、並列的な節関係に傾くため、否定作用域優勢解釈が可能になってくると考えられる。

以上の考察から、「に」の持つ中核の意味性質である「存在」が関与する事によって、節の前後関係が緊密化したり、「ずに」の否定的意味が強調されたりする文法現象が引き起こされていると考える事ができる。

4. 「ず」と「ずに」

吉永(2010)では、一般的に「ず」句は VNP (Verbal Noun Phrase) であるとし、「停車中」や「移動後」など同様の動詞的名詞句とみなされる事を提案した。並列節などの「ず」接続文の構造については今後の課題であるが、いずれにしても名詞性が強い性質は肯定連用形と共通するだろう。

また、「ずに」句については、副詞性の強いものと、そうでないものに区別される。

- (11) a. 醤油をかけずに食べたほうがおいしい。
b. 身体に悪いものは何も加えずに作っています。
c. 場所をよく調べずに行って道に迷ってしまった。

これらの「ずに」句は全て付带的な副詞成分であり「～しない状態の存在において」という否定的な状況の存在を表わしており、全体的な句構造において低い位置に配置されると考えられる。

しかし、並列的な「ずに」接続文については、構造位置の詳細は不明であるが、前述の副詞性が強いものと比べると、上位に配置されると思われる。

「食べに行く」「買いに行く」などの「に」については、「食べ」「買い」という連用形が動詞的名詞句として後置詞「に」と接続し、方向・目的を持つ状態での動作を表わしていると考えられ、この用法は「食堂に行く」のような方向・着点の「に」に連続的に繋がるであろう。

そして、これらの方向・着点を表わす「に」句は動詞句成分として低位置に配置されるが、

「ず」が前接した「ずに」句、更に並列的な内容を持つ「ずに」節は高い付加位置に配置されると考えられる。「に」の意味・機能は多岐にわたり、構造位置もそれに依拠して一様ではない事を提唱したい^{注3)}。

5. まとめと今後の課題

本論文では、並列用法の否定形接続「ずに」、「ず」の意味的相違、否定作用域での「ずに」、「ず」の意味的相違について観察し、両方とも「に」の本質的な意味・機能が関与している事を主張した。

「に」の中核的な意味・機能である、モノや状態の「存在」の意味・機能の有無によって、「ず」と「ずに」を巡る意味的相違が引き起こされているという事を提唱したい。

並列節の規定を巡って、また、否定の意味の作用域計算を巡っては様々な議論があり、これらについての詳細な研究は今後の課題である。

注

注1) 寺村(1984: 56)は、否定の連用形について三分類し、「く」形を第一連用形、「ず」形を第二連用形、「ずに」形を第三連用形としている。

注2) 日本語母語話者を対象とした調査では、15名のうち12名が??(ダブルクエスション:許容度がかなり低い)と回答し、(2)では「ずに」のほうがむしろ自然であると答えた者が過半数であった。

注3) 吉永(2012)「テ形節の意味と統語」では「テ」の意味・機能が一様ではない事を述べ、テ形節の構造位置は意味と連動して高低の相違がある事を述べたが、「ニ」についても同様に、意味・機能は一様ではないと考える。

参考文献

- Hirakouji, Kenji (1979) 'Ni' and 'No' in Japanese. PhD. Dissertation. University of California, Los Angeles.
茅野直子・秋元美晴(1986)『外国人のための助詞』武蔵野書院。
北原博雄(2009)「動詞の語彙概念構造と「に」句のスケール構造・統語構造に基づいた、着点構文と結果構文の平行性」『結果構文のタイポロジー』pp.315-364, ひつじ書房。
三原健一(2009 a)「方向と存在の文法」『語彙と意味の文法』pp.455-472, くろしお出版。
三原健一(2009 b)「スケール構造から見る結果構文」『結果構文のタイポロジー』pp.141-170, ひつじ書房。
三原健一(2011)「活用形と句構造」『日本語文法』11-1, pp.71-87, くろしお出版。
申亜敏・望月圭子(2009)「中国語の結果複合動詞」『結果構文のタイポロジー』pp.407-450, ひつじ書房。
寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版。
吉永尚(2010)「助動詞「ず」の統語論的考察」『園田学園女子大学論文集』44, pp.1-12。
吉永尚(2012)「テ形節の意味と統語」『活用論の前線』pp.79-114, くろしお出版。
吉永尚(2013)「否定接続に見る意味と構造の相互関与ーナイデ、ナクテ、ナク、ズを例としてー」日本語学会2013年度春季大会予稿集, pp.231-236(於大阪大学)。

〔よしなが なお 日本語教育・日本語学〕